様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０４４３

研究課題名（和文）機能範疇の投射構造への形式意味論的アプローチ：日本語とスラブ系言語の比較研究

研究課題名（英文）Formal Semantic Approach to Functional Categories: A Comparative Study of Japanese and Slavic Languages

研究代表者
楠本　紀代美（KUSUMOTO, Kiyomi）

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：５０３２６６４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、主節及び埋め込み節特有の現象の意味的側面を重点的に考察することにより、目に見えない機能範疇の投射構造が存在するか否かへの証拠を統語論自体以外の観点から探求した。日本語やスラブ言語の対格－属格交替現象、時の副詞節の時制解釈、与格主語構文などを比較言語学的観点から分析することにより、日本語の埋め込み節は他の言語のそれよりも小さい投射構造を持つことを理論化した。

研究成果の概要（英文）：In this project, we sought semantic and syntactic evidence for the existence of functional projections by examining linguistic phenomena peculiar to root or embedded clauses. We focused on accusative-genitive case alternation in Japanese and Slavic languages that we find in intensional contexts, cross-linguitic varieties of temporal interpretations in temporal adjunct clauses and dative subject constructions. We concluded that the size of functional projections in embedded contexts are not uniform across languages and in particular that Japanese embedded clauses are not full-fledged CPs.

研究分野：形式意味論

キーワード：形式意味論　機能範疇　格　スラブ系言語

１．研究開始当初の背景

自然言語の機能範疇にはどのようなものがあり、どの程度言語類型的に差異があるのかは特に統語研究においては様々な論議を呼んできた。従来補文標識節(CP)および屈折節(IP)と呼ばれた範疇が分割されまた新しい機能範疇が提案されている（Cinque 2002 等）。また英語では一般的に CP だと考えられている関係詞節が日本語では IP だと提案されるなど（Murasugi 1991）、言語間の相違も解明されていない点が多い。これら機能範疇の存在の有無を証拠だてる議論は、移動現象等の統語論に基づくものが中心であった。しかし意味の構成性の観点からすると、機能範疇の主要部が全て意味的に空であるとは考え難く、Kratzer (1996)などでは機能範疇の意味的役割について多くの提案がなされている。これらの研究対象は、特に形式意味論領域では主として印欧語であり、日本語の研究は未だ遅れを取っていると言ってよい。

主節にのみ現れ埋め込み節では観察されない主節現象に関しては、様々な角度からの統一的な研究が行われており、またそのような主節特有と見なされる現象が埋め込み節で観察される場合の研究も盛んである。しかし埋め込み節特有の現象は、個別の埋め込み状況や現象毎の説明を与えることで議論が終始していることが多い。日本語の研究も活発に行われているが（長谷川 2007 等）、統語論中心であり、形式意味論をはじめとする意味研究は量質ともに低調である。

日本では形式意味論の研究はあまり盛んではなかったが、東京で継続的に意味論研究会が開催されて 20 年が経過し、最近は大学院生であったメンバーが海外留学を経て帰国するなどし、参加人数も増加傾向にある。また研究代表者楠本が 2009 年度に関西学院大学に赴任して以来、関西在住の意味論研究者との交流も増え、2010 年度以降は、年に一回程度関西学院大学で意味論研究会を開催することができた。形式意味論の研究者ではない参加者も多く、少しずつではあるが形式意味論分野の研究の重要性が認識されて来ていると考えられる。また埋め込み現象の研究は、スペインで 2011 年 12 月開催の Workshop on Modification で多くの名詞句修飾関連の発表が取り上げられている他、日本語文法学会のシンポジウムのテーマに設定されていることからもわかるように注目される研究分野の一つである。

研究代表者楠本はこれまで、埋め込み節と主節の相違点と、比較言語（特に同じ時制の一致言語として総括されてきた日本語とスラブ系言語の相違点）という二つの観点から時制や相の研究を行っていた。その際、特に Arregui and Kusumoto (1998)でロシア語の時の副詞節は日本語のそれより豊かな（より主節に近い）構造を持つと提案することで、時制解釈の違いを導きだした。また最近では否定の意味（状態性）とそれが副詞句などに与える意味的影響についても研究を行っている。また、研究分担者浦は、格と機能範疇に関わる統語研究では大きな成果を上げており、本研究の発端となった対格—属格交替現象についても研究を続けている。また類型論の点でも多くの言語の比較研究を行ってきている。意味論と統語論を専門とする研究者が、同一の現象を二側面から見ることで、言語理論全般から見ても整合性の高い理論を探求することが出来ると思われる。

２．研究の目的

本研究の目的は、主節及び埋め込み節特有の現象の意味的側面を重点的に考察することにより、目に見えない機能範疇の投射構造が存在するか否かへの証拠を統語論自体以外の観点から探求することである。

日本語については、特に上で述べた名詞句修飾における統語現象（格交替）と意味現象を個別現象の解明にとどまらず総合的に考察する。Shimoyama (2011)が論じている形容詞の直接修飾用法と関係詞解釈の相違にも着目し、日本語の埋め込み節特有の統語構造とその認可メカニズムを提案する。

スラブ諸語の否定の属格研究は、格の認可とその意味的条件が中心問題となっており、機能範疇の投射といった構造の豊かさに言及したものはない。否定の属格の詳細な分布、移動現象との関連、時制や相解釈との関連などを総合的に観察し、Arregui and Kusumoto の提案が他の埋め込み節にも該当する（すなわちスラブ系言語の埋め込み節は主節に近い豊かな構造を持つ）ことを明らかにする。

さらに格交替を可能にしている否定と法について普遍的な共通項を見いだすとともに、統語構造の豊かさと意味解釈の可能性の相関性について日本語／スラブ系言語にとどまらない一般化を試みる。言語間で埋め込み節の構造に相違があるとすればそのパラメータを生み出すものは何であるかも考察対象としたい。

３．研究の方法

全体を通じて、主に意味研究は楠本が、統語研究は浦が担当したが、両面から考察することが必要な場合には両者の共同研究とした。

初年度の 2012 年度は Asano and Ura (2010)が提案する日本語の対格—属格交替理論を検証し、特に名詞句修飾における統語現象と意味現象を個別現象の解明にとどまらず総合的に考察した。楠本は特に関西方言で観察される対格—属格交替のメカニズムを考察し、日本語の埋め込み節の特殊な構造が交替を可能にしているとの仮説を立て、検証した。またこの現象とスラブ諸語の内包の属格と呼ばれる現象との比較言語学的考察を行った。浦は、日本語の埋め込み文「～思える／思われる」と与格主語との関連についての研

究を進めた。いわゆる与格主語構文との相違を考察することにより、日本語を含め拡大投射原理（EPP）が普遍的な原理であることを示した。この他、スラブ系言語の否定の属格や内包の属格についての文献調査を行った。日本語の格交替研究のほとんどが統語理論研究者の研究対象になっているのに対し、スラブ言語では意味現象に主眼をおいて研究されているものも多い。スラブ言語の格交替の意味特徴が日本語の格交替にも該当するかどうかの検討も行った。

2013 年度は、楠本は日本語の第四種動詞と呼ばれる動詞やそれに似た移動動詞の主節と埋め込み節での特殊な振る舞いについての研究を行った。これらの動詞の意味特徴を形式意味論の枠組みで記述し、その意味的違いが終止形での使用の容認可能性に影響を与えているとの仮説を提案し、検証した。浦は、「動詞句と節の双方が意味的に内包する相に関する情報がどのような形で統語論的および形態論的に反映されているのか」という問題について研究を行った。具体的にはグルジア語において動詞句の表す相の違いが、その目的語に現れる格接辞の変化となって現れることを突き止め、その統語的メカニズムの解明を行った。またドラヴィア諸語と日本語の与格主語構文について研究し、動詞の意味的特徴が深く関わっていることも解明した。また上記二つの研究をもとに人間言語における相の意味的統語的差異がどのように形態的差異になって表れるのかという問題にも取り組んだ。

最終年度（2014 年度）はこれまでの研究成果を踏まえ、より多くの言語を対象とし、比較研究を行った。楠本は、時の副詞節の時制構造と意味解釈を中心に、日本語、英語、スラブ諸語、スペイン語の比較を行った。具体的には Sharvit(2013)で提案された理論に反論し、時の副詞節の統語的構造の違い（投射構造の大きさの違い）が意味解釈に影響を与えるという仮説を検証した。浦は引き続き、動詞句の相解釈が統語構造や形態論的差異にどのように反映されるのかを研究した。特にマレイ語の受動態において動詞句の相の情報、動詞の形態変化の有無、目的語の格接辞の変化の有無の相関関係について、研究した。またスラブ語の文法的法と目的語の格形態との関連について、日本語の同種の現象との比較検討を行った。

研究期間全体を通じ、頻繁に会合を持ち、意見交換を行った。また主として意味論研究会や関西での生成文法討論会において成果を発表する機会を作り、それらの会の一般参加者も含め意見交換を行い、フィードバックを得る機会を持った。

４．研究成果

(1)格交替現象について

Kusumoto(2013)において、日本語とスラブ諸語の対格—属格交替現象についての研究成果を発表した。Asano and Ura (2010)で示されたように、日本語の対格—属格交替は、主語を欠く関係代名詞節という特定の埋め込み環境でのみで観察され、またその節の時制形態素にも制限がある。これに対し、スラブ諸語の対格—属格交替は主節／埋め込み節の区別なく観察される。この比較言語学的相違は、両者の埋め込み節の構造（大きさ）の違いに原因があると結論づけた。詳しく言うと、日本語の埋め込み節には時制節(TP)やそれよりも大きい補文標識節(CP)を欠く特殊な構造が現れることがあり、その場合にはその節を補部とする主要部名詞が節内の名詞に属格を与えることができると提案した。スラブ系言語ではそのような制限がないため、格交替が主節／従属節を問わず起こりうるとし、言語間の差異に説明を与えた。

(2)日本語の埋め込み現象について

Ura (2014)では、日本語の埋め込み文「～思える／思われる」と与格主語との関連についての研究を進めた。いわゆる与格主語構文との相違を考察することにより、日本語を含め拡大投射原理（EPP）が普遍的な原理であることを示した。節でないものには、拡大投射原理は適用されないため、このことは節の構造を見極める重要な要素となると論じた。

Kusumoto (2015)は、日本語の第四種動詞と呼ばれる動詞（例えば、「優れる」、「（山などが）そびえる」など）とこれらとよく似た振る舞いをする移動動詞についての研究である。これらの動詞は主節では常に「ている」形で用いられるが、埋め込み節では終止形も許容されるという一見奇妙な特徴を持っている。形式意味論の枠組みを用いてこれらの動詞を記述分析し、それぞれの動詞が持つ元来の語彙意味的な相違が統語的相違となって現れ、一般的な動詞とは主節での振る舞いが異なることを理論的に解明した。そのような相違が埋め込み節（関係代名詞節）では解消される点については、Shimoyama(2011)が論じている形容詞の直接修飾用法と時制句のある関係詞節用法との違いが、動詞にも存在することを提案し、節の投射構造の大きさが主節よりも小さいことが、これらの動詞の埋め込み節での特異な振る舞いの原因であると論じた。

(3)その他

Kusumoto and Tancredi (2013)は英語の否定極性表現(Negative Polarity Item; NPI)について、二重に作用域を取る分析を提案した。NPI は否定以外にも埋め込み節で認可されることが知られているが、その認可条件を統語的／意味的に包括して記述することには様々な困難が存在した。NPI の従来提案されてきた存在量化子としての意味には、主張部分と前提部分の２種類があるとし、その２つが異なる作用域をとると考える。この分析により、否定による認可のみでなく、普遍量化子を主

部とする関係代名詞節内や doubt などの動詞の補部内での NPI の認可も統一的に説明することが出来ると論じた。

石野・浦(2013)では、複数形主語が単数形の再帰代名詞を認可し、分配解釈を許す際の統語的意味的メカニズムを考察した。日本語や韓国語で分配束縛が可能であるのに対し、英語やドイツ語では不可能であるという言語間の差異には、再帰代名詞の素性の不完全性と時制の多重照合能力が関連しており、この二つの条件が満たされる言語でのみ、分配束縛が可能であるとした。このことにより、普遍文法には、従来提案されて来た、再帰束縛理論と一致理論に基づく束縛理論の両者が存在しており、相補分布的に作用していると結論づけた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① Kiyomi Kusumoto, On the Stativity of the Fourth-Class Verbs and their Cousins, *Japanese Korean Linguistics* 23,査読無, 2015, 印刷中.

② Kiyomi Kusumoto, Genitive Object in Kansai Japanese and Slavic Languages, *Formal Approaches to Japanese Linguistics* 6, 査読無, 2013, 109-120.

③ Kiyomi Kusumoto and Christopher Tancredi, Weak NPIs and Double Scope Quantifiers, 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』, 査読無, 2013, 180-226.

④ 石野尚・浦啓之, 分配束縛の統語メカニズム分析とパラメター理論, 『関西学院大学英米文学』, 査読無, 2013, 258-272.

〔学会発表〕（計６件）

① Kiyomi Kusumoto, Geis-Ambiguity and Tense in Adjunct Clauses, The 9th International Workshop on Theretical East Asian Linguistics, 2014.9.25, Nante (France).

② Kiyomi Kusumoto, Type Theory and Quantification, 日本第二言語習得学会, 2014.9.4, 関西学院大学梅田キャンパス（大阪）.

③ Hiroyuki Ura, 格≠一致？：disagreement between Case and Agreement, 日本英語学会, 2013.11.9, 九州大学（福岡）.

④ Kiyomi Kusumoto, On the Stativity of the Fourth-Class Verbs and their Cousins, Japanese Korean Linguistics 23, 2013.10.12, Cambridge, Mass. (USA).

⑤ Nao Ishino and Hiroyuki Ura, Distributive Binding and Two Types of Binding Theory in Syntax, 日本英語学会, 2012.11.10, 慶応義塾大学（東京）.

⑥ Kiyomi Kusumoto, Genitive Object in Kansai Japanese and Slavic Languages, Formal Approaches to Japanese Linguistics 6, 2012.9.27, Berlin (Germany).

〔図書〕（計１件）

① Hiroyuki Ura, Dative Subject and Impersonals in Null-subject Languages, *Japanese Syntax in Comparative Perspective*, ed. by Mamoru Saito, 査読無, 2014, 312, 275-308.

６．研究組織

(1)研究代表者

楠本　紀代美（KUSUMOTO, Kiyomi）
関西学院大学・文学部・教授
研究者番号：５０３２６６４１

(2)研究分担者

浦　啓之（URA, Hiroyuki）
関西学院大学・文学部・教授
研究者番号：４０２８３８１６